

漢方生薬ソムリエ

去る8月29日(金)、千葉大学亥鼻キャンパス 薬学部120周年記念講堂にて漢方生薬ソムリエの初級試験が実施された。結果は翌30日(土)の和漢医薬学会学術大会(幕張メッセ国際会議場)において掲示され、18名が合格したことが明らかとなった。

● 漢方生薬ソムリエとは

「漢方生薬ソムリエ」とは、2013年5月に設立された「日本漢方生薬ソムリエ協会」が立ち上げた制度である。

昨年8月に金沢市で開かれた第30回和漢医薬学会学術大会の合同企画「漢方生薬ソムリエ：生薬学スペシャリストの養成に向けて」において、生薬の総合的な知識を持つ人材として「漢方生薬ソムリエ」制度の概要が説明され、公開で第1回認定試験が実施されて、4人のソムリエが誕生した。4人の内にはクラシエ製薬漢方研究所・生薬研究グループの土田貴志グループ長も選ばれている。

● 目的

協会のホームページによれば、この制度は、「生薬の総合的な知識をもった人材の育成をはかり、もって、漢方医学の基礎をなすこの学問分野の発展をめざす。同時に、この制度によって養成された人材を広く国内外に活躍するのを助け、国際協力の発展に尽くすことを目的とする」を目的としており、「医薬系の大学や、漢方を専門とする医療機関、調剤薬局、生薬問屋、漢方薬製造メーカーなどにこの資格を有する人がいれば、業界全体のレベルの向上と活性化がはかれるであろう。薬学生、大学院生が在学中にこの資格を取れば、就職に有利であろう。またそれは、生薬学/和漢薬業界全体の学問的レベルの向上につながるであろう」と様々なメリットがあることが示されている。

● 背景

このような協会が発足した背景には、現在の薬学教育において十分な生薬の知識を習得するだけのカリキュラムが組まれていないという事実がある。

かつて麻黄からはエフェドリンが、甘草からはグリチルリチンが、その他、レセルピンやアトロピン、モルヒネや

ジギトキシン等々、幾多の生理活性を有する物質が生薬から見い出され、疾病の治療に活かされてきた。ところが主な生薬の解析が一段落したあたりから、生薬学は過去の学問のように見なされるようになった。

しかしながら、生薬は草根木皮というように植物から得られるものが多く、また動物、鉱物など天然自然の産物から得られるものであるため、その品質には自ずと微妙なバラつきがある。産地や気候、品種等によって品質に差が生じるのは当たり前のことであり、生薬の特性といえる。こうした品質の違いを見分けることは、生薬を用いた治療の現場や、生薬を使用する各種製剤においては、極めて重要なことである。

大学レベルで十分な生薬の知識をもった人材が育ちにくい今、臨床現場の医師等の強い要望から、「日本漢方生薬ソムリエ協会」が生まれた。そして、この協会の業務の一環として、「漢方生薬ソムリエ」制度が設けられ、専門知識を持った人材の育成が図られることとなったのである。

● 試験概要

今回実施されたのは「初級」試験であるが、「初級」の知識および技能とは、薬系大学の生薬学試験において80点程度の正答率が得られる者とされている。

試験概要は以下の通り。

受験資格	①かつ②を満たす者 ①和漢医薬学会会員、日本生薬学会会員、日本東洋医学会会員または日本漢方生薬ソムリエ協会賛助会員団体に所属の者 ②次のいずれかの者 A：薬系大学で生薬学を習熟した者 B：企業や病院などで生薬取扱い歴3年以上の者 C：A、Bと同等の知識や技能を有している者
出題範囲	日本薬局方収載生薬および処方
更新	3年毎の更新
試験形式	(120分) 筆記試験(5択問題、80問) 鑑定試験(20生薬について：生薬名、原植物名、薬用部位)

今後、「漢方生薬ソムリエ」の存在が広く認知されるとともに、わが国における東洋伝統医学の発展を支えていくことが期待されている。

日本中医学会報告

9月13、14日の2日間にわたり、日本中医学会第4回学術総会が開かれた。

会場は例年どおり東京都江戸川区のタワーホール船堀であったが、総合テーマは「なにわの中医学」と題して、西本隆先生(兵庫県西宮市)が会頭を務められ、準備委員長は萩原圭祐先生(大阪大学)、会頭補佐として西田慎二先生(日本赤十字和歌山医療センター)、土方康世先生(土方医院)、日笠久美先生(河崎医院)、西森婦美子先生(西森なおのてクリニック)、松川義純先生(松川医院)、河田佳代子先生(大阪漢方医学振興財団付属診療所)、田中秀一先生(田中医院)、高岡裕先生(神戸大学)、田川直洋先生(県立尼崎病院)が名を連ねておられ、関西の先生方が中心となった運営であった。

会頭から、関西における漢方生薬流通の歴史に始まり、漢方医学・中医学の変遷についての講演があった。生薬流通においては、豊臣秀吉が造った道修町に薬種商が集められて以来、そこが日本の薬品取引の中心となったこと、明暦4年(1658年)に薬種商が連名で奉行所に提出した文書がいまだに保存されていることなどの歴史が紹介された。また、関西において唯一「一貫堂医学」を実践されていた中島紀一(随象)先生のもとに多くの俊英が集まり、その自由な雰囲気の中から、中医学を追究する者、新たな医学を求める者、現代医学との融合を目指す者が育っていったというお話が印象的であった。このことを知る資料として「座談会 中島紀一先生を囲んで」(THE KAMPO Vol.2 No.5 1984年)があるが、今読んでも中島先生のお人柄と、それを慕う若手医師の熱意が伝わってくる。

シンポジウムでも「かつて、なにわにこんな中医学があった～中島随象の遺産～」と題して、関西を拠点に中医学の発展に大きな足跡を残された山本巖先生、伊藤良先生、松本克彦先生、田川和光先生の業績を取り上げた講演があった。田川先生は56歳で急逝されたが、その遺徳を偲んで設立した「田川記念漢方研究会」が今も活動されているとのことである。

他の演題では、

○加島雅之先生(熊本赤十字病院)は、「アンチエイジングの鍵を握る腎」と題して、腎の概念が時代を経てどのように変化したかを論じられた。古い時代には小建中湯と八味丸が同じ腎の病態に使われていたのが、その後区別されるようになったことは耳新しい知見であった。張元素により真陰不足に六味丸、真陽不足に八味丸が使われるようになったということなど、現代では一般的な認識となったものが、どんな歴史の過程で生まれてきたのかを知ることができた。

○西森先生は、「加齢に伴う疾病への漢方臨床の実践」という題で、性別が異なると加齢により現れる病証も異なるというご講演であった。男性は陽虚の症状が出やすく、女性は陰虚から化熱に出やすいとのことである。

○萩原先生は、「老化促進マウスを用いた腎気概念の検討」というご講演で、老化促進マウスが腎虚モデルとして適切であること、老化はミトコンドリア機能の低下であり、これを腎気丸が回復させる、と興味深い発表であった。また萩原先生は、「ガイドラインを踏まえた関節リウマチの融合治療について」と題して、リウマチの治療は、抗TNF- α 抗体であるレミケード®等が登場したことにより画期的な展開を見たが、いまだ人參湯が重要な治療薬であることを、症例を挙げて発表された。

以上、聴講できた講演から、一部を抜粋してレポートした。

